

# 日本昔話「鬼が笑う」にみる母性

千野 美和子

## I、初めに

関敬吾編の『桃太郎・舌きり雀・花さか爺－日本の昔ばなし（Ⅱ）－』に収録されている話に、「鬼が笑う」という昔話がある。河合（1982）は、「深層心理学の立場に立って、日本の昔話の中に、日本人の心の在り方を見出す」ことを目的として、幾つかの昔話を分析している。その中の1つとしてこの昔話を取り上げている。筆者は、まず、この昔話をタイプと類話から検討し、この昔話が特別な位置にあることを示し、その後、河合の考えを踏まえつつ、少し異なる視点から、この昔話について考えていきたい。

## Ⅱ、昔話のあらすじ

しんしょのよい旦那さまの1人娘が嫁に行くことになった。嫁入りの日になると、娘は立派な迎えの駕籠に乗り、母親をはじめ親戚の人たちが大勢駕籠について、嶺や峠を越えていくと、ふいに空から黒い雲が降りてきて、駕籠の中の花嫁をさらって飛んでいってしまった。母親は気も狂わんばかりに心配して、あてもなく山を捜し回った。日が暮れたので、庵女（尼）さまのいる小さなお堂に泊めてもらった。庵女さまから、娘は川向こうの鬼屋敷にさらわれていること、その川を渡る方法を教えてもらった。朝起きると、お堂はなく、母親は石塔を枕にして寝ていた。庵女さまにお礼を言って、教えられた通り、川を渡ると、きき覚えのある機音がした。母は娘と再会し、2人は抱きあって喜びあった。娘は大急ぎで母親に夕飯を食べさせ、鬼に見つからないように母親を隠し

た。鬼が帰ってきて、人間の匂いがすると、人間の数だけ花が咲くという不思議な花が3つ咲いているのをみて、今にも娘につかみかかろうとした。娘はふと思いついて子どもができたと言った。喜んだ鬼が酒に酔いつぶれているすきに、母親と2人で逃げようとした。そこに庵女さまが現れて、早く船で逃げるように言った。母子は船に乗って川を逃げたが、鬼がそれに気づき、家来に川の水を飲み干すようにいつけた。川の水は減って、母子の舟は後戻りして、今にも鬼に届くようになった。そこへまた、庵女さまが現れて、大事なところを見せるようにいい、庵女さまも一緒になって着物の裾をめくった。それを見た鬼はげらげら笑って、水をすっかり吐きだした。それで、母子は無事逃げることができた。母子が庵女さまに礼を言うと、庵女さまは、自分は野中の一本石塔だが、かたわらに毎年一本ずつ石塔を立ててくれるように母子に頼んで消えてしまった。母子は毎年忘れずに石塔を立てたという。

### Ⅲ、この昔話のタイプについて

この昔話は、『日本昔話大成』では、「本格昔話」の中の、「逃竄譚」に分類される247A「鬼の子小綱」の類話として収録されている。関（1978）はこの247Aの話について次のように解説している。この話は柳田が美女奪還とよんだものであり、また、アアルネ・トンブソンによって世界中の昔話をもとに作られたATの分類によると、AT327「子どもたちと鬼」に対応し、ヨーロッパでは、グリムの「ヘンゼルとグレーテル」が代表とされる。AT327のモチーフの中心は、親が子どもを養うことができず山中に遺棄するもので、その途中に道しるべになるものを捨てて家に帰る話で、いわゆる児童遺棄の問題である。

また、稲田（1988）は、この247Aを、「むかし語り」の「XI厄難克服」の350「鬼の子片づら」のタイプとして分類している。このタイプは次のモチーフからなる。

- 1、女が、鬼のおこすつむじ風にさらわれて鬼の妻にされ、片づらが鬼の子を生む。

- 2、鬼のすみかを捜してきた夫は、鬼にかぎ出されて賭けをいどまれるが、そのつど鬼の子の助けで勝つことができる。
- 3、夫は、鬼に人を煮る釜に入れられるが、鬼の子に救い出される。
- 4、夫が妻と鬼の子を連れて舟で逃げ出すと、鬼が川の水を飲み干し、舟は逆戻りする。
- 5、妻が尻をまくって叩くと、鬼は大笑いして水を吐き出し、三人は無事逃げ帰る。
- 6、鬼の子は、やがて人を食いたくなるから、と親に頼んで、瓶につめ生き埋めにしてもらおう。
- 7、三年たって親が瓶を掘りだすと、瓶にお金がつまっている。

このタイプについて、美女奪還の枠組みを持ちながら、語り手の関心が鬼の子に傾いていると解説する。この話に対応する AT のタイプはないが、一部モチーフが一致する AT の参照タイプとして、AT327 と AT400 「男が失踪した妻を捜しに行く」を挙げる。

本論で取り上げる昔話「鬼が笑う」は、関の分類では、「鬼の子小綱」に分類され、稲田の分類では、「鬼の子片づら」に分類される。確かに、上に挙げたモチーフの4,5を持っているが、解説で述べられているような物語の中心テーマである鬼の子どものテーマを欠いている点で、このタイプとはいいがたい。むしろ、物語の展開からいえば、関の 247B に対応する、稲田の 328A 「美女奪還－人影花型」のタイプに近いと思われる。

このタイプは次のモチーフからなる。

- 1、男が、さらわれた娘を救おうと山賊のすみかに着くと、娘は男を櫃の中にかくまう。
- 2、帰ってきた山賊が、白い男花が咲いているから男が来ている、と娘を責めると、娘は、みごもった男の子のせいだ、と言いのがれる。
- 3、男は、祝い酒に酔いつぶれた山賊を切り殺し、宝物を持ち帰り娘と夫婦になる。

このタイプには対応する AT のタイプ、AT506B 「王女が盗賊たちから救出

される」がある。また、参照タイプとしてAT327、AT400、AT516B「誘拐された王女」、AT581「呪物とトロウル」を挙げる。

「鬼が笑う」は、このタイプの中心モチーフである2のモチーフをもつ。さらわれた女性を取り戻すという大きなテーマは、稲田の328A「美女奪還－人影花型」にあてはまるが、結末には3のモチーフの代わりに、350「鬼の子片づら」の4、5のモチーフが入る。

以上、タイプからこの昔話を考察する。稲田のタイプ328Aは、「美女奪還」と名付けられたように、さらわれた女性を無事救い出すというテーマとみれば、いわゆるヨーロッパの昔話の典型タイプの、王子がさらわれた王女を救い出し結婚するというテーマに近いものととらえることができる。事実、このテーマを持つ類話もなくはない。しかし、「鬼が笑う」の女性を連れ戻すという解決の仕方を見ると、328Aのモチーフ3のように殺すという直接的手段でなく、タイプ350のモチーフ4、5に描かれているような独特の解決法を示す。しかし、タイプ350の中心テーマは、逃げ出すときの鬼の子の活躍とその後の鬼の子の結末であり、この物語の主眼として語られているテーマとは異なるものと考えられる。つまり、モチーフとして328Aの2と350の4、5を合わせ持つ昔話と考えることができる。この2つのモチーフを持ちつつ、その中心テーマはさらわれた女性を取り戻すことである。「鬼が笑う」はこの中心テーマを物語るのに、この2つのモチーフを必要としたといえる。

#### IV、類話の中での位置

関の「鬼の子小綱」に収録されている類話と比較しながら、「鬼が笑う」の特異性について検討したい。この類話には、日本で語られた昔話の中で共通した物語の展開を持つ昔話が集められている。共通した物語展開とは、「女性のもといた場所から、どこかに連れて行かれ、連れて行った男性的存在のもとで暮らす。その後、女性の身内が女性を捜しに行き2人は再会して、もといた場所に戻る」である（ただし、この展開をもたない類話も4話収録されているが、

この展開を持つ類話を比較検討の対象とする)。この物語展開の中に、タイプ 328A の 2 の「人影花」のモチーフを含む類話や、タイプ 350 の 4 と 5 の「逃竄(逃走)」のモチーフを含む類話がある。また、娘が連れて行かれるときに、「たて草の種、またはケシの種、麦を播いておき、爺がそれを道しるべにして探しに行く」という展開を含む類話があり、関が解説で触れた AT327 「道しるべになるものを捨てて家に帰る」に対応すると述べた根拠がうかがわれる。

ここでは、モチーフでなく、登場人物について考える。まず、連れて行かれる人物について取り上げる。娘、女房、妻、姉、妹、母など身内との関係において異なるが、すべて女性である。また、連れて行く存在は、鬼が最も多く、ついで盗賊、山賊、怪物がある。多義性はあるが、この物語の展開では、鬼にしても、山賊にしても、すべて、性的にみれば男性的存在である。しかも、鬼はもとより盗賊や山賊にしても、女性と同じ連続性をもつ日常を生活している人間というより、女性からすれば非日常、または別の世界に生活している存在であるということができる。そして、連れて行かれる理由として、さらわれたという類話がある一方、爺が畑打ちをした者に娘をやるというものや猿婿入型をとる類話も多く、連れて行く目的は自分の嫁にするためであることがわかる。さらう側からすれば欠けている女性性を補う動きとみることができるが、女性側からすれば本人の意志によらない結婚ということになる。さらわれるという視点でなく、異なる世界の男性と結婚すると考えれば、「アモールとプシケ」のような「美女と野獣」型の異類婚の昔話と考えることもできる。しかし、ここで取り上げる日本の昔話はその後の展開が異なる。ヨーロッパの昔話では様々の試練や苦難の中、結婚を継続させた結果として、異類である夫が、人間の男性に変化するのに対して、日本の場合、結婚するもののそれを放棄し元の世界に戻ってくるのである。このタイプの昔話の場合、結婚という視点より、さらわれたという視点の方が強いことがわかる。そして、ここまでは、「鬼が笑う」も同様の展開をたどる。女性である娘が非日常の男性的存在である鬼にさらわれ、明確な言葉では表現されていないが、鬼と結婚し、非日常の世界である鬼屋敷で暮らす。

では、捜しに行く人物はどうか。この人物には多彩なバリエーションがある。稲田のタイプ 328A に挙げられているように、男がさらわれた女を救い夫婦になる話は少ない。むしろ、タイプ 350 に挙げられているような元々夫婦である妻がさらわれて、その夫が捜しに行くものが圧倒的に多い。また、それと同等あるいはそれ以上に多いのが、娘を捜しに行く父（爺）である。その多くは、父が願ったことをかなえた代償に娘が嫁に行くことになったものである。大多数の類話は、このどちらかに含まれる。

「鬼が笑う」は、母が娘を捜しに行く話であり、この類話に属しながらも、登場人物の関係を考えた場合、異なる意味を持つ。上記に挙げたものは、夫婦関係、または父娘関係が語られるが、この話は母娘関係を取り扱っているからである。原典をたどると、この昔話は、新潟県の見附市の 1 人の女性が語った話であることがわかる（文野 1932，岩倉 1974）。

## V、母と娘の物語

前に述べたように「鬼の子小綱」の類話に属しながらも、他の類話のほとんどが、父と娘、または夫と妻の話であるのに対して、この話のみが母と娘の話という特別な位置にあることがわかった。母と娘の話である昔話は「鬼が笑う」のみであるが、この話によく似た話が神話に見られる。

河合（1982）は、この昔話の「女性性器の露出とそれに伴う笑い」というモチーフ（稲田のタイプ 350 のモチーフ 5 にあたる）を取りあげ、このモチーフをもつ日本の「天の石屋戸神話」とギリシアの「デーメーテル神話」を比較しながら、その普遍的意味を考察している。この点については、河合の書に譲り、ここでは河合の考えを踏まえつつ、女性の心と母なるもの（母性）という視点から考えたい。

この昔話では、嫁入りの途中で、突然、娘がさらわれる。これを河合（1982）はノイマンの自我確立の過程についての考えを元にして、「根源的な母・娘結合の支配する世界においては、事象の変化は永遠に繰り返され、そこには本質

的变化は生じない」とし、「このような永遠に続く反復を打ち壊すためには、母・娘の結合を破る男性の侵入を必要とする」と述べ、その視点からこの昔話を分析している。

これに対して、筆者は、女性（母）の中に生じた心の動きという視点からこの昔話をとらえて、考えてみたい。筆者は、河合の述べるところの逆のことが起こっているのではないかと考える。つまり、母・娘結合を破るために男性が侵入したのではなく、男性が侵入することによって母娘の絆が切られるという事態が生じたゆえに、母と娘の結合を強くするための心の動きが生じたと考えられないだろうか。娘がさらわれるという事態が起きたからこそ、母性が強く働き、娘を必死になって捜すという行為が見られたのではないか。なぜなら、物語の冒頭の嫁入りでは、「しんしょのよい旦那さまの一人娘が嫁に行くことになった」と、父の娘であることは述べられているが、母のことは親戚同様にしか語られておらず、娘がさらわれた後に、母が重要な役割を担うことになるからである。嫁入りの時の母は、親戚同様に、つまり親戚と同じ距離で娘の幸せを祝福している。つまり、このような男性的侵入によって、母・娘の結びつきを強くする動きが母の心の中に生じたと考えられるのである。母娘の関係の中で、娘に危機的な状況が起きたとき、強く母性が発動するのではないだろうか。それが最終的には娘を救い出すことになる。娘が危機に陥ったとき、母娘関係において生じる母性の在り方を表わしていると思われる。娘の女性的な傷つきを根源から癒せるのは母(母性)ではないだろうか。そのような物語として、この昔話をとらえたい。

さて、少し話を広げて、この物語を思春期の娘の物語として考えた場合、ある示唆を与えてくれる。思春期とは、まさに少女が女性に成熟する時期であり、強い守りが必要とされる。早すぎる異性との出会いは成熟を途中で止めてしまう。母からすれば、突然の異性の侵入は、個を持たない存在、まさに鬼にさらわれたようなものである。娘にとっても、衝撃の出来事である。それは女性としての心に深い傷を与えてしまう。この時、母が必死になって娘を捜す、言い換えれば娘に結びつこうとする、娘へ向かう母のエネルギー（母性の発現）が、

母のもとに娘を取り戻し、守りへと引き戻すのではないだろうか。この母娘の根源的な関係の中で、娘は癒しを体験できるのではないだろうか。

先に挙げたギリシアのデーメーテル神話は、この昔話とよく似ている。大地の女神のデーメーテルの娘ペルセフォネは冥界の王ハデスによって地下の世界へさらわれてしまう。母のデーメーテルは娘がいなくなったことを嘆き悲しみ、娘を探しにギリシア全土を放浪する。そして、娘を失った悲しみのために、大地の実りが止まってしまう。ゼウスは仕方なく、ハデスを説得し、1年の3分の1はハデスのもとで暮すようにするが、残りは母のもとで暮せるように取り決める。このデーメーテルの女神の祭礼は、エレウシスの秘義と呼ばれており、その中心は、ペルセフォネの失踪と再発見の物語であるという(Grant,M&Hazel,J., 1973)。これについて、ノイマン (Neumann,E.1963)は「母を通じての娘の再発見であり、デーメーテルを通じてのコレー(少女の意)の再発見であり、母と娘の再結合である。」と述べ、再発見の心理学的な意味として、「男性の略奪と侵入以前にもどることであり、結婚後の母と娘の母権的一体感の回復である。」とする。

ノイマンの述べる「母を通じての娘の再発見と母と娘の再結合」は、神話と昔話の違いやギリシアと日本の違いはあるにせよ、「鬼が笑う」においても中心のテーマであるということが出来る。しかし、神の物語ではない日本の昔話ではその展開が異なる。

## Ⅵ、庵女さまの存在

「鬼が笑う」の母は気も狂わんばかりに心配して、あてもなく山を捜し回ったが、娘は見つからない。その母の前に、1人の女性が現れる。お堂に住む庵女さまである。この庵女さまが、母が娘を見つけ出し2人が鬼の屋敷から逃げ出すのを助けるのである。この庵女さまというのはどんな存在だろうか。

この昔話では、さらわれた娘を救い出すという物語を展開する上で、最後まで重要な役割を演じる。というのは、この存在なくしては、離れてしまった母

と娘が再会することはできなかったからである。物語の表の筋に出てくるのは、この母と娘であるが、その背後に2人を包み込む空気のように庵女さまが存在し、折に触れて姿を現わして2人を助ける。庵女さまに光を当てて、この物語を、不思議な援助者の物語と読むこともできる。

昔話にはたくさんの援助者が登場する。主人公が困ったときや危機に陥ったとき、その場に登場し、主人公を助ける。その一時のみの援助である場合もあるし、ずっとそばにいて主人公を助けて、主人公が幸せになったのを見届けていなくなる援助者もある。その援助者は、男性、女性、動物、神などの超越的存在である場合もある。「鬼が笑う」の類話では、氏神が子どもとなり、2人を助けて、無事に戻るといなくなるという話がある。

また、昔話に登場する母の人物をみてもみると、日本、ヨーロッパに限らず、よく登場するのは、主人公の娘の継母である。継母とは、個人的な母性の否定的イメージを持つ存在である。この否定的側面が、昔話では主人公の成長を促す意味を持つことがある。個人を超えた母性の否定的側面を表わす存在として、ヨーロッパでは魔女が有名である。主人公を食べるために捕まえたり、主人公の行く手を妨害する。主人公の成長を促すというより、悪として存在する否定的要素の強い普遍的な母性である。これらは、援助的側面をもたない母性像である。また、普遍的母性という点で魔女に近い存在として、ホレおばさん（ロシアではババヤガー）と呼ばれる女性がいる。この人物は魔女的要素を持ちつつも、主人公を助ける肯定的要素ももっている。彼女の言いつけを守るものには、よいものを与える助け手となるが、言いつけを守らないものに対しては相応の罰を与える母性の両面性を表現する。母性の両面性を合わせ持つものとして、日本では山姥という存在がそれに近い。人を食べる恐ろしい一面を持つ反面、人々に幸運をもたらす福の神の一面がある。山中に住む女の妖怪また異人とされ、零落した山の神の1つの姿とされる（稲田ほか編, 1994）。昔話の中で、はっきり山姥という名前は出てこないが、山の中で主人公に助言を与える老婆や、山の中の鬼の家に来た主人公をかくまい、不思議な品物をくれる老婆なども山姥の肯定的なイメージを持つ存在であろう。また、「鬼が笑う」の類話の

中には助けてくれる山の婆、山姥の妹が登場する話がある。

さて、「鬼が笑う」の庵女さまは、現実の庵女さまではない。この世の人間ではなく、石塔であった。石塔が神仏に仕える尼の姿を借りて現れたのか、石塔の下に眠る尼である女性が生前の姿となって現れたのか定かでないが、そのようなこの世のものでない女性的存在が、娘を捜す母を助けた。先に挙げた登場人物のように比較的幾つかの昔話に登場する馴染みのある存在ではなく、この話のみに現れた独自の存在である。その意味で、伝説的要素をもつ昔話ともいえ、この物語においてこそ生じた助け手であるといえる。このような存在が娘を捜す母を助けることができる。この話のように娘がさらわれるなど母娘関係の絆に亀裂が生じたとき、それを補うように、母の心に娘を守り、助けようとする母性的な心の動きが生じる。その時、心の中に個人の母を超えた母なるものが生じ、個人の母を助けるのではないだろうか。母の中に生じた母なるものの存在が母を助ける。少し広げて言うなら、母が娘を守ることができるのは、母個人の力だけでは難しいことを意味する。つまり、母が娘を守るためには個人を超えた母性が必要ということではないだろうか。

また、この助け手は、石塔であり庵女さまである。そこに何らかの宗教性が込められているのは確かである。話の展開の中での、庵女さまの言動を見てみると、鬼にさらわれた娘の居所やそこに行く術を知っていたりと、日常とは異なる世界に通じる知恵を持っていることがわかる。しかし、それだけでないのが、次のエピソードである。母と娘が舟で逃げようとしたところ鬼が川の水を呑み込んで、危うく鬼に捕まりそうになるときに現れて、思いがけないことを提案する。それは河合が考察した「性器の露出」である。この意味は、河合が考察しているように、日常レベルから呪術的なレベルまでの多層的な意味を含んでいる。それゆえにこそ、鬼の笑いを生じさせ、結果的に母と娘は無事に逃げる事ができた。この助け手は、宗教的要素を持った存在であるが、ここで表現される宗教性が、超越性をもつ仏教的なものに留まらない、日常性や呪術性を含んだ多層性を持つものであることがわかる。このような性質をもつ母性が、母が娘を取り戻すのに成功する。神や観音のような超越性や畏敬さを持つ

ていないし、山姥のような土臭さや人に恐怖を与える恐さを持っていない。しかし、ほどほどの高みと土の温もりを感じさせる宗教性をもった母性であると思われる。

庵女さまが「大事なところを鬼に見せてやりなされ」という。これによって、恐ろしい鬼は笑ってしまい、呑み込んだ水を吐き出す。女性の大事なものは、相手を戦い倒すのではなくて、相手を笑わせてその本来的力を無くす。大事なもので象徴されるものは、女性性の本質的な在り方ではないだろうか。

## Ⅶ、毎年石塔を立てること

日本の昔話の結末は、独特の終わり方をする。それについて、河合（1982）は、マックス・リュートイの言葉を挙げて「すべてを失った無の状態に至る」と述べる。その上で、河合は何も起こらなかったということを積極的に評価して、「無が生じた」ととらえ、1つの昔話が「無」を語るために存在していると主張する。

この「鬼が笑う」の結末についても、河合（1982）は、次のように述べる。「母による娘の発見は、再生の儀式としての意味をもつが、一方からみれば『男性の侵入を無に帰する』はたらきと見ることができる。」と述べ、また、「毎年増えていく石塔は、永遠に無事に同じことが繰り返されることを、見事にイメージ化している。平和な姿であり、母と娘の感謝の気持ちがそこに込められている。しかし、何も起こらない」と日本の昔話のもつ「無に返るはたらきの強さ」を強調する。

確かに、リュートイや河合の述べるとおり、西洋の昔話の当然の結末である結婚を欠いている点で、西洋的結末を期待して読む者は肩透かしを食わせられる。しかし、結末に向かうプロセスで生じる登場人物の心の動きや変化を考えた場合、単に元に戻ったと言えるものではない。西洋同様日本にも、そこに心の動きや変化が存在し、元の心に戻っただけで何も起こらなかったわけではないのである。「鬼が笑う」は、物語の始めと終わりでは心の在り方がずいぶん異なるのである。毎年石塔を立てることは、単に同じことが繰り返され無に

なることではなく、同じことを繰り返すからこそ石塔が増えて行くのである。そこに生じている心情は、毎年変わらず無事に過ごせることを庵女さまに感謝する気持ちである。その気持ちが積み重ねられていくことを意味する。ここに表現されているのは変わらないことへの感謝、祈りである。変わらないことの不満ではなく、変わらないでいられる無事を感謝する。この心の有り様は本来、日本人がもっていたものであるが、変化することばかりを追い求める現代人にとって失ってしまったものである。しかし、それだからこそ、今その価値を再認識する必要がある。

娘は鬼の世界で暮らすのが、母の元に戻る。これは男性側からすれば、その動きを無にする働きと映るが、女性側からすればどうだろうか。このような男性の動きは、女性にとって強引な略奪に過ぎず、女性をひどく傷つける行為ではない。女性にとっては、結婚とは一方的な侵入ではなく対等の出会いでなければならないと思うからである。娘にとっては、苦難の末、母による癒しがあったと思われる。しかし、鬼の世界で暮らしていた娘はただ受け身的に境遇を受け入れていたのでない。それを物語るのが、再会の様子タイプ 328A のモチーフ 2 での娘の返答である。母と再会し、娘は母に夕飯を食べさせて、鬼に見つからないように母を隠した。そして、今にもつかみかかろうとする鬼に、子どもができたと返答し、怒っていた鬼が急に喜び出した。そこには、遠くから来てくれた母をねぎらい世話をする母性的様子がうかがわれるし、脅威の状況においても恐怖に呑み込まれず、逆手にとって鬼を欺き鬼の怒りを喜びに変える機知の知恵を持っていた。ギリシアのペルセフォネがさらわれて嘆くばかりで食事もとらないという状態とは違って、ここでの娘の在り方は、逞しさやしたたかさすら感じられる。この特徴を表現するために、このモチーフは必要とされたと思うのである。つまり、このような状況においても娘は娘から母性をもつ女性へと変容の道を進んでいる。母と離れてもおおそれできたのは、機を織るということと関係があるのではないか。機織りとはきわめて女性的な仕事とされる。確かに、機織りとは、手を使って糸から布を作りあげるという生みだす仕事である。そして機織りとは 1 人で行なう仕事である。1 人機を織るこ

とに向かうことはある意味自分に向かうことでもある。機を織るという仕事を通して、自分の女性性を育てて来たともいえる。逆に、母のいる世界から離れても、機を織るという女性的な仕事をすることによって、女性としての自分を支え、拠り所としてきたのかもしれない。

裏側のもう一つの物語、庵女さまから見た場合、石塔を立てることは、大きな意味がある。物語の結末として見た場合も大きな出来事である。毎年石塔を立てるための謂れの物語とみることができるからである。石塔とは、土井(1972)によると、石で作った卒塔婆であり、本来の起源はスツパにあり、仏教的礼拝対象である。もともと造立の理由は死者の冥福を祈るために立てられた仏教的な供養塔婆であるという。石塔は、1、死者の墓として立てられる場合、2、墓としてでなく死者の冥福を祈ることを目的とした追善供養として立てられる場合、3、2の目的が薄れ、立てた人自身の逆修供養として立てられる場合の3つの場合がある(水藤, 1991)。この話の場合、初めの石塔が、墓そのものなのか、供養塔であったのかわからないが、話の終わりに立てられる石塔は、供養塔であるのは確かである。庵女さまは、なぜ毎年石塔を立てるように頼んだのだろうか。石塔を立てることは、供養される者にとってどのような意味をもつものだろうか。土井(1972)は、「卒塔婆の造立は亡者が極楽に再生し修行して仏になるために遺族がその再生修業を助けるために行なう善根、善行となるためである。」という。また、土井は、石塔を立てることによって死者がどんな浄土にも往生できること、あるいは死者が有限の体をはなれて絶対無限の体になれるという説を挙げている。

もし、石塔である庵女さまが、成仏できない死者の霊であるとするなら、成仏するために石塔を立てることを願ったことになる。つまり、救われない霊が、人を援助することによって、救われた物語といえることができる。主人公を援助した人物が最後に主人公によって救われるストーリーは西洋の昔話にもある。また、土井によると、石塔そのものが神聖視され、崇拝の対象とされているという。庵女さまが告白するように、石塔が庵女さま本来の姿であるとすれば、石塔という宗教的存在が、庵女さまという姿をとって、母娘の前に現れて、2

人を助けたということが出来る。そうすると、石塔を立てることは、庵女さまのためでなく2人のためである可能性がある。つまり、2人が生きている間に善行を行なうようにという仏教的教え（3つ目の場合の逆修供養に当たる）ということになる。毎年立てるということは、善行を積むことで、積善を行なうことであり、そこにあるのは、一年一年と時間をかけながら仏教的修業を深めていくイメージではないだろうか。

そのように見ていくと、この物語が冒頭のさらわれた場面から、宗教性に関わる物語であることがわかってくる。鬼にさらわれるということ「神隠し」ととらえ、河合（1982）は柳田の言葉を挙げて、そのような経験に会う人は普通の人よりも宗教性が高いことや、非日常の世界に親近性をもつと述べる。確かに、鬼は、非日常の存在であり、プリミティブな男性性をもった神的存在といえる。娘個人からすれば、日常を剥奪されて非日常の世界へ連れ去られるのであるから苦しみの極みであるが、個人に突然神性が侵入したとみることもでき、宗教体験というにとらえ方もできる。つまり、ギリシア神話と同様にこの世でない荒々しい神的存在によってさらわれた娘が、神的存在である石塔が姿を変えた庵女さまの助けによって、元の日常の世界である母のところに戻ることができたということができる。そして庵女さまの言いつけ通り毎年石塔を立てる。人にとって、宗教体験とは、こちら（日常）の世界に戻って生きることに意味を持つと思われる。こちらの世界に戻ることができたのは、石塔である庵女さまのおかげである。この体験によって、2人は石塔を立てるという行為で表わされる宗教的世界に開かれた日常生活を過ごすようになったといえよう。河合の述べるようにそこにあるのは「感謝の気持ち」である。この気持ちは日常的に使用される言葉であるが、筆者はすぐれて宗教な言葉であると思う。

以上、幾つかの視点から結末について考察した。結末について、河合が『『男性の侵入を無に帰する』はたらき』と述べる「無」を女性側から見れば、たくさんの物語が生じ進行しているのである。女性側からすれば、無に戻るのではないことを強調したい。

## VIII、終わりに

昔話の研究には様々なアプローチがある。本論では、昔話を心理学的に考察することを目的とした。元来、昔話の心理学的解釈は、ユング心理学の理論を中心として、西洋の昔話を題材に行なわれていた手法を手本としている。その手法に当てはめると、日本の昔話は非常に解釈しづらい特徴を持っている。筆者は、その解釈を基礎としつつも、昔話に心の在り方、すなわち心の動きや変化が表現されているととらえて、さまざまな昔話をつきあわせ比較しながら、昔話そのものから意味を考えていくやり方をとっている。昔話に描かれている内容を丁寧に読むことによっていろいろのものが見えてくる。そこに表現されているのは、ただ1つの意味ではなく、多様な意味である。つまり、正しい解釈が1つだけあるのではなく、夢の解釈と同様様々な解釈が生みだされてよいのである。逆に、多次元の解釈を許すのが昔話の特徴である。

私たちの心の中には、この昔話に登場する庵女さまのような存在がいて、何かあったときに私たちを助けてくれる。心の中に宗教性を持った母性の存在があることをこの昔話は教えてくれる。

## 文献

- 土井卓治 (1972). 石塔の民俗. 岩崎美術社
- 文野白駒 (1932). 加無波良夜譚. 玄久社
- Grant, M. & Hasel, J. (1973). Gods and Mortals in Classical Mythology, George Weidenfeld & Nicholson Limited. 西田実ほか訳 (1988). ギリシア・ローマ神話事典. 大修館書店
- 稲田浩二 (1988). 演習版・日本昔話タイプ・インデックス. 同朋社
- 稲田浩二ほか編 (1994). 〔縮刷版〕日本昔話事典. 弘文堂
- 岩倉一郎 (1974). 新潟県南蒲原郡昔話集. 三省堂
- 河合隼雄 (1982). 昔話と日本人の心. 岩波書店
- Neumann, E. (1963). The Great Mother—An Analysis of the Archetype. Second

- Edition, Princeton University Press / Bollingen Foundation Inc. 福島章ほか  
訳 (1982). グレート・マザー－無意識の女性像の現象学－. ナツメ社
- 関敬吾編 (1956). 桃太郎・舌きり雀・花さか爺－日本の昔ばなし (Ⅱ)－.  
岩波書店
- 関敬吾編 (1978). 日本昔話大成 6. 角川書店
- 水藤真 (1991). 中世の葬送・墓制－石塔を造立すること－. 吉川弘文館